研 究 結 果 報 告 書

研究結果

本研究は、江戸中後期において、徂徠学派ないしその周辺知識人達が如何に「古文辞学」を理解し且つ応用していたか、また彼らが「古文辞学」の視点から外交の現場で如何に朝鮮通信使と筆談していたか、という問題を探求したものである。

本研究を進めた結果、以下のように新しい知見を得ることができた。

①本研究は、従来の通信使研究が重要視している善鄰と友好という「和」の面に加え、詩文による競争の面も重視して、東アジア漢文学における「古文辞学」の展開と徂徠学派文士と朝鮮通信使の交流行動が持つ意味を追求した。

②従来、荻生徂徠の「古文辞学」は、常に文学という私的空間の学問として理解されているのに対し、本研究では、「古文辞学」が外交という公的空間の実践の場に如何に係わっているかという問題について、実例を挙げて論じた。

③古文辞学を上述の視点からアプローチしたことによって、従来あまり取り上げられることがなかった萩藩の山県周南とその弟子或いは孫弟子である山根華陽、小田村鄜山、滝鶴台の唱和集と詩文集にも言及し、彼らの詩文が持つ意味を検討した。

④本研究を通じて「古文辞学」を展開することによって、徂徠学派文士達自らが生きた時代の社会は「文明」が進化していると肯定的に捉えたことが明らかとなり、「古文辞学」と徳川後期における日本特殊論、日本優位論との関連性を見出すことが出来た。

⑤本研究を通じて、十八世紀頃の朝鮮が接触した中国の相手は、主に清朝政府と北方中国であったのに対し、日本が接触した相手は主に南方の海外交易に従事していた民間人であった。こうした違いに着眼して、「十七世紀以後の東アジア漢学を検討する必要性がある」という問題意識を提起した。

上述の研究成果は、下欄「研究成果の公表について」の論文１．に纏めて発表した。今後は、論文１．の成果を踏まえ、引き続き論文２．を纏め、発表する予定である。

研究成果の公表について（予定も含む）

口頭発表　（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

論文　（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

1. 藍弘岳「徂徠学派文士と朝鮮通信使―「古文辞学」の展開をめぐって―」（『日本漢文学研究』第9号、2014年）に掲載予定（査読あり）。

2. 藍弘岳「『文学』と東アジア：荻生徂徠の国際認識」（『アジア遊学』2014年）に掲載予定。

書籍　（題名・著者名・出版社・発行時期等）